

令和5年 12月26日	農作物病虫害発生予報 1月	山口県病虫害防除所
----------------	--------------------------------	-----------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	6
III	参考(予報の見方、気象予報)	7

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	やや少	やや少	少
	うどんこ病	少	少	少
	アブラムシ類	多	多	多
	ハダニ類	少	少	前年並

お問い合わせ先

山口県農林総合技術センター(山口県病虫害防除所)

TEL (0835)28-1211 (代)

FAX (0835)38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 12月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.3%（平年9.4%）、発病株率0.2%（平年0.8%）、発病果率0.0%（平年0.2%）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では、1月の気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 多湿条件で発病が助長されるため、換気等により施設内が多湿にならないよう努める。

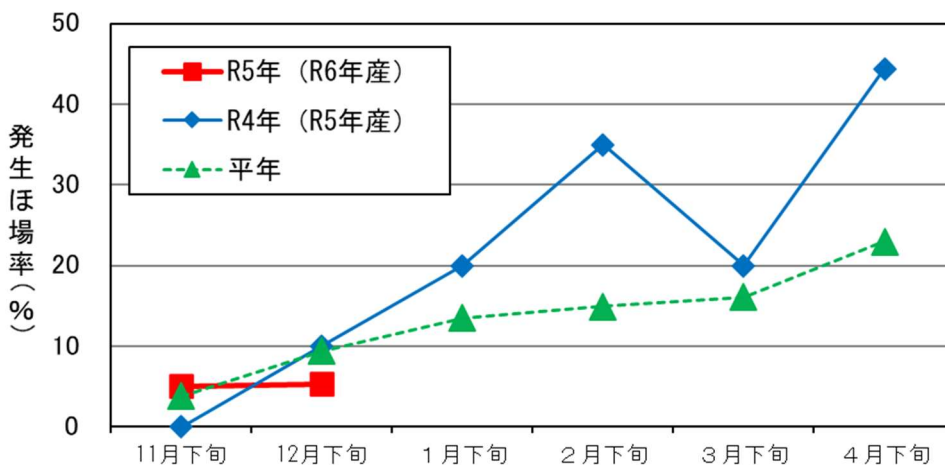
イ 被害果等は伝染源となるので、早期に取り除き、ポリ袋等に密封してほ場外に持ち出し、焼却や土中に埋めるなど適正に処分する。

ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発生を助長するため、適正な施肥管理に努める。

<防除のポイント>

ア SDHI剤（アフェット剤）、QoI剤（アミスター剤）、ポリオキシシン剤およびジカルボキシイミド剤（スミレックス剤、ロブラール剤）は耐性菌が出現しているため、薬剤散布後に防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴ灰色かび病の発生推移

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	発病前、発病初期

(2) 予報の根拠

ア 12月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.3%（平年21.1%）、発病株率1.2%（平年2.6%）、発病葉率0.4%（平年0.7%）、発病果率0.0%（平年0.3%）で平年に比べ少なかった（－）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害茎葉、被害果は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

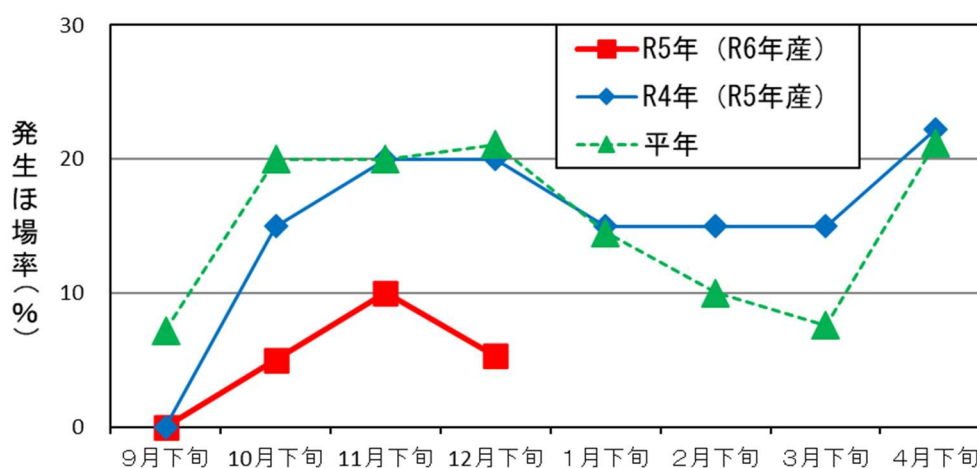
ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。

ウ DMI剤（トリフミン剤）、QoI剤（アミスター剤）は耐性菌が出現しているため、必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

エ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1～2回薬剤を追加散布する。

オ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移

3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率42.1%(平年23.9%)、寄生株率14.0%(平年2.7%)で平年に比べ多かった(+)。

イ 気象予報では、1月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 現在、多発しているほ場では、速やかに防除を実施する。

イ 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。

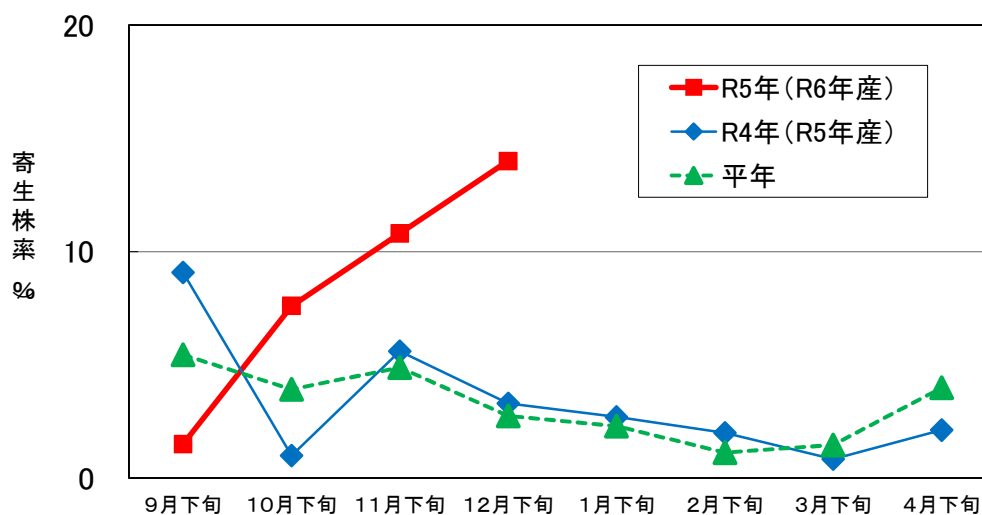
ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

エ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

オ ハダニ類の天敵(ミヤコカブリダニ)を放飼している場合は、影響の少ない薬剤(サフオイル剤、ウララ剤、チェス剤等)を使用する。

(山口県農作物病虫害・雑草防除指導基準ーミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)



イチゴ アブラムシ類の発生推移

4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	前年並	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.5%(平年32.7%)、寄生株率0.4%(平年10.0%)で平年に比べ少なかった(－)。

イ 気象予報では、1月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

ア ハダニ類は体長が0.5mm程度と小さく確認しにくいいため、ルーペ等を使用して葉裏をよく確認する。

イ ハダニ類は白い紙袋を使った簡易な確認方法で容易に確認することができる。

※ 摘除した下葉10枚程度を白い紙袋に入れ、室内に1日おき、紙袋の縁に集まるハダニ類を観察する。

ウ ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

イ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7～10日間隔で散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

エ 天敵(ミヤコカブリダニ)を利用している場合は、次のことに注意する。

(ア) 天敵に影響の少ない薬剤(マイトコーネ剤、ダニコング剤、スターマイト剤等)を使用する。

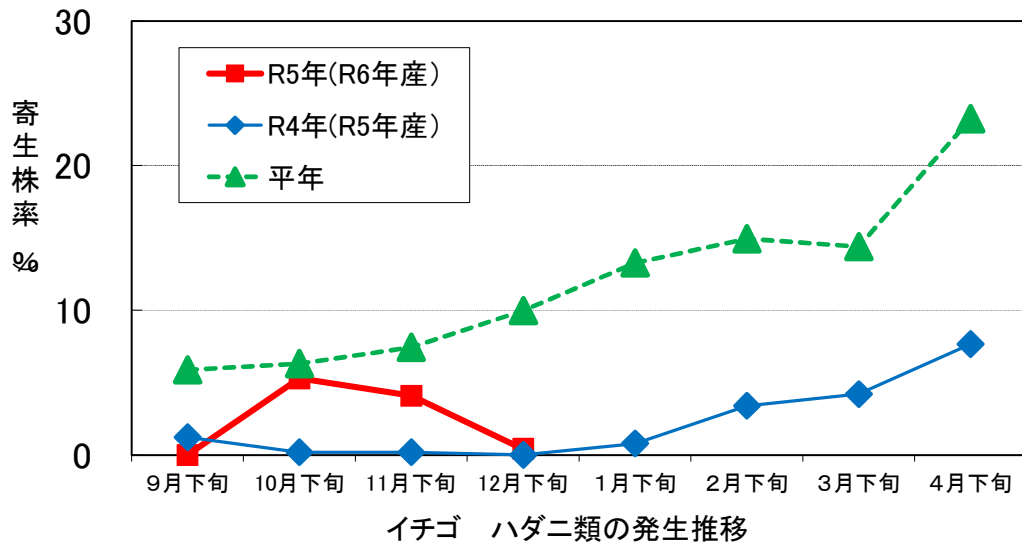
(イ) 硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

※ 放飼方法、放飼後の管理についてはメーカーホームページを参照

オ 開花期以降の薬剤散布は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準－ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	アザミウマ類	やや多	やや多	多	15.0	7.8	
	コナジラミ類	やや少	やや少	多	10.5	27.1	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較（半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（12月21日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	1 0	3 0	6 0
降 水 量	4 0	3 0	3 0
日 照 時 間	3 0	3 0	4 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	2 0	5 0	3 0
2 週 目	1 0	2 0	7 0
3～4 週 目	2 0	3 0	5 0